

国語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

平成15年度から実施の高等学校学習指導要領を受け、平成18年度に試験科目が『国語』に一本化され、本年度は『国語』として10回目の試験である。高等学校学習指導要領では、必修科目は「国語表現Ⅰ」及び「国語総合」の2科目とされ、生徒はそのいずれかを選択することとなっている。

高等学校「国語」教科担当としての立場から、本年度の試験問題を検討した。検討を加える視点として次の6点を設定した。

- (1) 高等学校学習指導要領の目標・内容等に沿った問題（素材文・設問）であったか。
- (2) 高等学校における授業や学習活動の実態に配慮がなされた問題であったか。
- (3) 受験者の基礎的・基本的な国語力を幅広く総合的に判定し得る問題であったか。
- (4) 素材文は「国語表現Ⅰ」「国語総合」の教科書で扱われる程度のものであり、高校生が読むのにふさわしく、魅力的なものであったか。
- (5) 設問は、内容・形式・選択肢などによく検討が加えられ、受験者の読解・思考過程を想定するなどの配慮がなされていたか。
- (6) 本試験との間で、問題の適否及び難易に関して不適切な較差はなかったか。

以上の視点に立ち、「試験問題の内容・範囲等」「試験問題の分量・程度等」「試験問題の表現・形式等」の面から、第1問～第4問までそれぞれに検討を加えて、評価し意見を述べる。

2 試験問題の内容・範囲等

第1問 北垣徹の評論「運動する認識」（『世界思想』40号2013春刊所収）からの出題である。論理展開の明快な評論文、認識論からの出題であった。近代以前の認識の在り方と近代以後の認識の在り方の変化が論じられている。論理展開が明快な文章であるので、受験者にとっては取り組みやすかったと思われる。本試験と同様に段落番号が付されている。

問1 全て常用漢字であり、基本的な漢字の知識を問う適切な出題である。

問2 「運動が認識を可能にする」という主張が述べられている第4段落の理解を問う設問である。傍線部の直後に、足によって「相対的に高い視点が確保される」ことと「視点を高く保ったまま、自在に移動することができる」という説明があり、難なく正答にたどりつく。

問3 傍線部の主張の根拠となっている具体例について問う設問である。「本文とは別の具体例」を選択肢から選ぶという目新しい形式になっているが、難易度は高くない。

問4 「視覚的メディア」と「身体」の関係性を問う標準的な設問である。抽象的な概念を取り上げてはいるが、傍線部の後にある映画についての説明部分と「映画という媒体と身体が接続されて、認識が生まれる」を踏まえれば正答にたどりつく。

問5 本文後半部で示される「認識」と「身体」の関係について尋ねており、主題の把握を確かめる設問で、やや広い範囲の読を求めている。3行選択肢であるが、誤答部分がはっきりしているため、無理なく正答を選び出せる。

問6 本試験同様、表現に関する標準的な設問であり、表現を重視する出題意図が感じられ

る。形式も「適当でないもの」を八つの選択肢から二つ選ぶ形で本試験に合わせている。

第2問 大庭みな子の小説『紅茶』からの出題である。本試験と同様に作品全文を用いて、完結した小説世界を読み解く力を求めている。孫娘に気兼ねして本来の自分を抑えつけ、長生きすることに後ろめたさを感じている老女が、一人の老人とのふれあいを通して「少女のような」気持ちを取り戻していく姿を描いている。「老人の恋」がテーマであり、心情をつかみづらい部分もあったと思われるが、身近な他者に対して想像力を持たせたいという意図が感じられる。

問1 語句の意味を問う設問。いずれも語句本来の意味を問う基本問題である。

問2 指示語の指す内容を明らかにして老女の心情に迫る設問。この後の展開を読み取る上で重要なポイントを押さえる適切な出題である。

問3 老女にとって、夕暮れは他人に言えない「自分自身の言葉」に対して素直になることができる時間であるという点を読み取らせる。「素直になる」ということを正答③で「自分に忠実」と表現していることに違和感を感じた受験者もいたかもしれない。

問4 老い先が短いのに老女に金銭的な負担を負わせることやお互いの家族を巻き込むことを躊躇する老人の気持を読み取らせる設問。受験者の生活感覚に直結していないため、老人や老女の置かれている状況を踏まえての老人の気遣いを読み取ることは難しかったと思われる。

問5 老人の口吻と老女の心情の両方を把握させる設問。旅行の話題をはじめた場面から傍線部までを踏まえて選択肢を吟味する必要がある、細部まで読解する力を求める良問である。

問6 文章の表現や構成に関する設問である。本試験と同様に六つの選択肢から正解を二つ選ぶ形式であった。正答⑥は容易に選択できたであろうが、正答③に関しては「意志」という表現に引っかかりを感じた受験者もいたであろう。

第3問 室町時代の成立とされる悲恋遁世物の『しぐれ』からの出題。主人公の貴公子が最愛の女性と結ばれながら、親のすすめる政略結婚のためにその人を失い、再び結ばれ得ない悲劇の物語は、中世を通じて愛好されたテーマである。本試験の『夢の通ひ路物語』同様、中世の擬古物語からの出題である。昨年度の本試験、今年度の本試験と同様に、人物関係図やリード文、(注)も丁寧に付けられており、内容理解の手助けになったと思われる。

問1 語句の解釈を問う設問である。本試験の語句問題に比べると、単なる知識にとどまらず文脈に沿って適切に意味を捉える力を問う良問である。

問2 昨年度と同様に文法説明問題であった。いずれも基本的な文法事項を取り上げており、本試験で6年ぶりに出題された敬語の問題よりは易しい。

問3 傍線部を含む北の方の会話文の正確な解釈から心情を把握させる標準的な問題である。

問4 三条の姫君の思いを読み取る設問である。誤答②の選択肢には解釈上明らかな誤りといえる箇所がない。「さり」の内容に直接関連のない「おとい」のことを含んでいる点を不当とするのであろうが、かなり紛らわしい選択肢であったと思われる。

問5 和歌の説明問題であるが、作者は選択肢によって判断できるので、内容を問う設問となっている。和歌と和歌が詠まれた状況を照らし合わせて内容を捉え、選択肢を吟味しなければならない。誤答①の「永遠の別れになるかもしれず」の部分で受験者は判断に迷ったであろう。

問6 本試験の問6同様に内容を問う設問であるが、本試験とは異なり「合致しないもの」を答えさせる形式である。本文全体の内容把握を確かめるための適切な設問である。

第4問 東漢の文人蔡邕が書いた『琴操』からの出題である。「三士窮」という琴の曲の由来を述べた文章である。返り点も送り仮名もない傍線箇所は1カ所のみであり、内容も把握しやす

- い素材文である。設問は8問で本試験より1問増加した。
- 問1 漢字の意味を問う基本的な設問である。「卒然」や「罷免」などの熟語から漢字の意味を類推できただろうと思われる。
- 問2 「之」の指示するものの組合せを選ばせる設問である。いずれも「之」の前の部分の読解を正確に行わせるための基本問題である。
- 問3 傍線部の解釈に関する設問である。傍線部を含む一文が選択形の句法であることに気付けば正解にたどりつける基本問題である。
- 問4 空所補充と空所を含む傍線部の解釈を問う設問。本文全体の内容から答えを考えさせる標準的な問題である。
- 問5 本試験では出題されなかった返り点の付け方と書き下し文を確認させる設問である。文脈と訓読の規則を照らし合わせて検討させる良問である。
- 問6 生き残った革子の心情を問う設問である。傍線部前後だけでなく本文全体を把握したうえで解答させようとする意図は評価できるが、選択肢に迷う部分がない。選択肢に工夫が欲しい。
- 問7 空所補充と書き下し文を組み合わせた設問。漢文句法の知識と文意とを照らし合わせて選択肢を吟味させる良問である。
- 問8 「三士窮」という曲の説明としてふさわしいものを選択するよう求めている設問。本文全体の把握ができているかを確認する適切な設問である。三行選択肢ではあるが、紛らわしい選択肢はなかった。

3 試験問題の分量・程度等

- (1) 分量について
- 追・再試験の本文の字数（漢文以外は文字数×行数）を本試験と比較すると次のようになる。

	本試験	追・再試験（本試比）
第1問 評論	約4,200字	約3,400字（－800）
第2問 小説	約5,800字	約6,480字（＋780）
第3問 古文	約1,200字	約1,500字（＋300）
第4問 漢文	207字	218字（＋11）

- 追・再試験の分量は本試験とはほぼ同じで、本試験とのバランスという点で適当であった。
- (2) 設問数について
- 制限時間80分に対して、大問が4問、解答数は本試験と同じく37であった。
- (3) 難易度について
- 第1問は本試験と同程度、第2問～第4問は本試験よりはやや難しかったが、本試験の情報が公開された上での試験でもあるため、本試験とのバランスを考慮すれば難易度としては適当であったと言える。

4 試験問題の表現・形式等

- (1) 表現について
- 「適当でないもの」、「合致しないもの」という形式が含まれていた。受験者が内容を理解しながら、不注意により不正答になる事態を避けるために、設問の形式をそろえることが望ましい。

(2) 配点について

各大問を50点満点とする配点に変化はない。解答一つ当たりの配点も、内容に見合った配点であり、最高点は8点であった。

(3) 形式について

選択肢については、本試験とのバランスが考慮されていた。

5 要 約（意見・要望・提案等）

追・再試験の受験者はごく少数であり、入学者選抜全体に与える影響は小さい。しかし成績資料として本試験と同等の扱いを受ける以上、相互の難易較差は最小限にとどめなければならない。この点を考慮すると、今年度の追・再試験は、全体的に本試験との釣り合いが取れていたと考えられる。素材文は標準的で受験者の基礎的な国語力を幅広く判定することができる文章であった。設問に関しても高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえた適切な出題である。

この追・再試験が、今後の高等学校「国語」の目指すべき指針を示してくれることを切望し、以下に意見・要望等を示す。

- (1) 第1問について、構造が明確な評論文で論旨が把握しやすく適当な素材文であった。設問に関しても、本文全体の論理展開を踏まえた上で正確な内容把握を求める工夫がなされていた。今後とも論旨の明確な素材文の選定を望む。
- (2) 第2問について、本試験と同様、作品全文を本文としており、一つの小説世界を読み解いていく姿勢が大切にされている。設問に関しては、本文全体を踏まえた内容把握を求めており、登場人物の心情を細かく読み取らせるための工夫がなされている。完成された一つの小説世界を読みとらせる出題を今後も期待したい。
- (3) 第3問について、基本的な知識の確認だけにとどまらず、文脈に沿って登場人物の心情や状況を考えさせる設問構成であった。傍線部の引き方や選択肢の表現に工夫を望む。
- (4) 第4問について、本試験同様、返り点や送り仮名がない傍線部は一箇所のみであり、内容も読み取りやすい素材文であったので、内容把握は容易であった。問7のような、知識理解・内容把握などを組み合わせた複合的な問題の作成を望む。